

中学校国語科における「批評」カリキュラムの研究

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教科・領域専攻 言語系コース（国語） 幾田伸司 研究室
高知県立安芸中学校 教諭 濱田美貴

1 はじめに

周知の通り、平成 20 年に告示された現行学習指導要領において、「言語活動の充実」が謳われ、言語活動を通じて指導事項の習得を図るという方向性が前面に打ち出された。しかし、「言語活動」を有効に実践する能力の育成を図り、学習者の「言語活動」の質を高めていかなければ、「指導事項」を身に付けることは難しい。こうした認識のもと、「言語活動を実践する能力」自体を体系化していく必要性を感じ、本研究を開始した。

2 研究の目的

今回提示された言語活動例の中で、3 年生で「書くこと」「読むこと」の二領域に渡って示されているのが「批評」である。つまり「批評」は、中学校の完成段階において実践できることが目指される言語活動であると考えることができる。そこで、「批評」ができるためにどのような能力が必要かを明らかにし、平成 24 年度版中学校国語教科書において「批評する力」の習得に向けてのカリキュラムがどのように構成されているかを検討することを、本研究の目的として設定した。

本研究は、以下の手順で進めた。

- ① 「批評」とは何かを史的経緯を踏まえて明らかにする。
- ② 学習指導要領や現行教科書の考察を踏まえ、中学校国語科における「批評文」の位置づけと内実を明らかにする。
- ③ 「批評」に必要な力を措定する。
- ④ 現行教科書における「批評する力」の育成を図るカリキュラムを考察する。

3 研究内容

(1) 「批評」の定義

『中学校学習指導要領解説国語編』（2008）（以下『解説』と略記する）では、『批評』とは、対象とする事柄について、そのもののよさや特性、価値などについて、論じたり評価したりすることである。」と説明されている。このような「批評」概念がどのように形成されてきたのか、戦後の国語教育における「批評」の定義や考え方をたどって考察し、「批評」の特徴を次のようにまとめた。

- ① 批評は、作品の特性や価値を明らかにする行為である。
- ② 批評では、読者が主体的に読み取った判断・評価を述べている。
- ③ 批評は、分析に基づいて客観的に述べている。
- ④ 批評は、個人の考えを他者と共有できるように述べている。

そして、『解説』で述べられている「現代の批評」は、こうした側面を含みつつ、批評する対象が文学作品のようなテキストか、社会的事象かによって重点を変えて実践されていると捉えた。

(2) 中学校国語科における「批評文」の特徴と類型

「書くこと」の言語活動例の中で、「鑑賞文」「意見文」「批評文」はそれぞれ各学年で実践される主たる作文ジャンルとして位置づけられている。そこで、これらの文章ジャンルの特性について、

『解説』の説明、現行中学校国語教科書（全五社）の取り立て学習材を検討し、その関連性を整理した。批評文と鑑賞文を比較すると、対象をよく受け止めて、その良さや感動の根拠を見出すという点で通じるが、根拠の客観性や論理性をどれだけ求めるかという点では異なっている。また、批評文と意見文は、相手を「説得する」意図を持ち、論理的な思考を求める点では共通の力が求められるが、より広い角度や高い位置（外側）から客観的に見ること、対象をしっかり分析・吟味する点においては異なっている。三つの文章ジャンルを比較すると、「根拠」を挙げることや分析をすることは共通している。しかし、「鑑賞」－「意見」－「批評」と進むにしたがって、主観的→客観的、一面的→多面的、感性的→論理的といった、ものの見方や読み方、書き表し方がより求められるようになり、活動の質は段階的に高まっている。作文カリキュラムにおける「鑑賞」－「意見」－「批評」の配列は、その学習レベルの高まりを発達段階に合わせて系統だてている。

また、現行教科書五種の「批評文を書く」取り立て学習材を比較・検討した結果、現行教科書における「批評」のねらいは「説得力のある文章を書くこと」と、「ものの見方や考え方を深めること」であった。現行教科書では、「批評」とは、「社会生活に関わる事物や出来事を観察・分析することでよく理解し、対象が持つ意味や目的に応じた観点から分析して、その良さや妥当性を評価していく」ことや、「文学作品などに関する自らの問題意識や印象をもとにし、その根拠となるものは何かをたどっていくことで、自分の考えや作品の価値を問う」活動であると捉えられている。

(3) 批評に必要な要素

「批評する力」を具体化し、カリキュラムの柱立ての指針を得るため、「批評文を書く」取り立て学習材の学習過程を検討した。ここでは、「鑑賞文」「意見文」の作文過程と区別される「課題設定・取材」段階に焦点をあてて考察し、批評に必要な要素として「分析の観点を持つこと」「分析すること」「自分の考えを持つこと」を措定した。それぞれの定義は次の通りである。

- 分析の観点 … 対象の特徴を明らかにするための目のつけどころや切り口。
- 分析 …… 対象の特徴を明らかにするための思考方法。
- 自分の考え … 対象についての判断や評価。

(4) 「批評」カリキュラムの検討 —東京書籍『新しい国語』（平成24年度版）の場合—

東京書籍『新しい国語』（以下、『東書』と略記する）で「批評」を行うことが明確にされている学習材は、第3学年「読むこと」領域の「形」「風の唄」と、「書くこと」領域の「観察・分析して論じよう 批評文」のみである。前者はともに小説で、後者は文字と画像が組み合わされた「ロゴマーク」「ポスター」を対象とした作文教材である。しかし、対象や分析の方法が異なる「批評」の力が、それぞれ一度の活動で十分に習得できるはずがない。これらの単元は「批評」を重点的に指導する場であり、この学習材に向けて「批評」を培う学習が積み重ねられたり、あるいはこの学習材での学びを活用して、その後の学習材の活動が実践されたりするのである。

そこで、(3)で見出した3つの力をカリキュラム検討の柱とし、『新しい国語』（平成24年度版）の学習材に付記されている「学習のてびき（課題）」や学習材本文の記述をもとに学習活動を抽出し、より具体的な言語能力ごとにカリキュラムを考察した。「分析の観点」については、さらに「登場人物」「場面の展開」「表現の仕方（リズム・情景描写・読み手意識）」「テキストの作られ方（語り手・作品の構成・作り手）」の四系列に細分し、それぞれの観点を習得するためのカリキュラムを検討した。「分析する」では、「分類・比較する」「因果関係をつかむ」の二系列に細分した。

ここでは、検討の具体例として、「分析の観点」のカリキュラムから「テキストの作られ方（語り方）」について考える学習を取りあげて紹介する。

『東書』で「語り方」について考える学習活動を設定している学習材は、次の通りである。

〈表 「分析の観点」のカリキュラム④－「テキストの作られ方」について考える学習①－語り方〉

学年	番号 ¹	学習材	領域	学習活動 ²
1	2 1	少年の日の思い出	読む	「冒頭」の場面から、少年時代の体験を振り返る「客」の思いを捉える
				「僕」のチョウ集めの場面から、「僕」はどのような少年だったか、「僕」から見てエーミールはどのような少年だったかを捉える
2	5	字のない葉書	読む	「あれから <u>三十一年</u> が過ぎて、「私」は父のことをどのような思いで振り返っているかについて、話し合う
	2 7	いきいきと描き出そう 俳句から始まる物語	書く	主人公を、 <u>一人称や三人称にして物語を書く</u>
3	5	形	読む	もともになった話と読み比べて、「形」で詳しく描かれていること、 <u>削られていることを捉え</u> 、「形」の小説としての工夫や魅力をまとめる
	6	風の唄	読む	小説の最後の部分には、どのような意味や効果があるか話し合う（たすけ ³ －「 <u>視点</u> 」が切り替わっていることに着目する）

「語り方」について考える学習は、「読むこと」の小説・随筆の学習材と第2学年の「書くこと」の学習材で取り上げられている。

第1学年では、「視点」に着目させて「語り手」の存在を認識させている。これまでの小説は、語り手が作中場面に登場しない三人称視点の作品であったが、「少年の日の思い出」は、前半の語り手が「私」、後半の語り手が「私」の友人（客）である「僕」の、一人称視点の物語である。ここでは、少年時代の体験を振り返る「客」の思いを捉える課題で、誰が語っているのかを確認し、「作者」と「語り手」を区別するとともに、後半の回想部分で語り手が何を語ろうとしているかをつかませている。また、「僕」から見てエーミールはどのような少年だったかを捉える課題で、語り手が誰の視点から語っているかをつかませ、その語り方は客観的なものではないことを認識させている。

第2学年では、第1学年同様に語り手を認識させ、語り手の意図を捉えさせる学習が行われている。「字のない葉書」では、今の「私」による31年前の出来事の語りを通して、「今」の語り手の思いを考える課題が設定されている。これは、なぜ31年前の出来事を語ったかという語り手の意図について考える課題でもある。また、新しい学習としては、「視点人物」に着目し、視点の転換を図ることで「語り方」の工夫を考えさせている。具体的には、物語の創作（「いきいきと描き出そう 俳句から始まる物語」）において、自らが語り手となることで語り手を意識させるとともに、一人称、三人称のどちらで語るのかを選択させて、語り方の違いを考える学習がなされている。

第3学年では、語り方の工夫を捉え、その効果を考える学習へと発展している。「形」では、もともになった古典作品と比べて「詳しく描かれていること」「削られていること」に着目させ、そのライトの意図を捉えることによって、語り方の工夫や効果について考えさせている。「風の唄」では、「視点」を切り替えることによって、結末部にどのような意味や効果をもたらせることができているかを考えさせている。

このように、「語り方」について考える学習は、「人称」に着目し、第1・2学年では「語り手の

¹ 「言語」に関する学習材を外した、各学年における学習材の配列番号を示している。

² 「課題」と教科書の記述からの引用、もしくは筆者が要約・修正した内容を示している。下線は筆者による。

³ 「課題」を行う際の、着目点やヒントを示したもので、教科書の記述から、筆者が要約・修正した内容を示している。

認識」や「語り方の意図」を学んでいる。次に、第2・3学年では「視点の転換」による「語り」の多面的な書き方や読み方を学習し、第3学年では「語り手の工夫」の意味や効果を考える学習へと進んでいる。「語り方」について考える学習は、下の学年で学んだことを、次の学年でもう一度学習させて習得を図るとともに、それを踏まえた新しい学習を加えながら系統化している。

以上のような手順で、各カリキュラムの検討を行った。検討で明らかになったことを以下に示す。

ア 「分析の観点」のカリキュラム

(ア) 登場人物

まず「言葉（せりふ）」に着目させ、それから「態度」「行動」「場面」への着目に比重を移行させながら進んでいる。また、それらの描写に表された「思い」や「人物像」を捉える学習から、「行動や言葉」「描かれ方や設定」の持つ「意味」、「登場人物の考え方」「主題」「背景」へと、学年が進むにつれて「何」を捉えるのかという対象が増えていく。作品を読み取る学習から読み深める学習へと発展していくように系統化されている。

(イ) 場面の展開

「山場」「山場と冒頭」「結末とそれまでの場面」と着目する場面を広げながら、「気持ちの変化」「考え方の変化」「人間関係の変化・その理由」へと、捉える変化の対象が移行していくように系統化されている。

(ウ) 表現の仕方

「リズム」について考える学習は、リズムを生んだり変調したりする表現技法、語調・文体などに着目させ、声に出してリズムを体得すること、テキストから表現の工夫を発見すること、リズム表現を用いて書くことといった活動を通して、リズムの持つ効果を捉える学習が設定され、積み上げられている。

「情景描写」の表現について考える学習は、「比喩」「擬人法」「擬音語」「擬態語」「イメージ語（感覚表現）」「色彩語」に着目して、それらの意味や効果を捉える。また、情景描写から心情を読み取ったり、その描写の効果を考えながら作品を味わったりすることや、自らがよりいきいきと豊かな描き方ができることの学習が積み上げられている。

「読み手意識」に関する表現について考える学習は、「呼びかけ・問いかけ」に着目して「親しみ・興味」を抱かせることから、「意表を突く表現」「強調・誇張表現」に着目して「興味」を引きつけ印象付けること、そして「比喩表現」「対比する表現」「断定的な文末表現」に着目して「分かりやすさ・説得力」を持たせることへ展開する。このような観点から、「読み手」を意識した表現の工夫と効果に気づかせる学習が積み上げられている。

(エ) テキストの作られ方

「語り方」について考える学習は、先に示した通りである。

「作品の構成」について考える学習は、第1学年では「伏線」に着目して構成の仕方の意味を捉えさせ、第2・3学年では「結末」部分の工夫に着目し、その終結の効果や意味を捉えさせる学習が設定されている。

「作り手」について考える学習⁴は、「非連続テキスト」について、まず「特徴」や「役割」について知る学習がなされ、その後「効果」を考える学習へと進んでいる。また、その活用や「文字」との組み合わせを考える学習としては、目的・相手、意図といった要素が徐々に加わり、それらに必要な「非連続テキスト」や「文字・文章」、および、その両方を選択して伝えることへと段階的に移行している。「非連続テキスト」、および「文字」との組み合わせ

⁴ ここでの考察は「非連続テキスト」と「文字の組み合わせ」を対象を絞っており、挿絵を読むなどの活動は含んでいない。

せによる「効果」については、分かりやすさから、相手をひきつける力や説得力を持たせることをねらいとしたものへと発展させており、学習者自らが効果的な表現活動ができることや、対象に表されたものから「作り手の意図」およびその「効果」を捉えることができるように系統化されている。

イ 「分析する」のカリキュラム

(7) 分類・比較する

まず第1学年では、「情報を共通点に分け、見出しをつける」など、「観点を見つけ、分ける」という「分類」に関わる能力の習得が図られている。次いで第2学年でも「分類」を活用した学習が継続され、第3学年では「分けたものを比べる」という比較の方法と関連付けながら、情報を整理する力の育成を図っている。「比較」の学習は重点的には第3学年に位置付けられているが、「差異」を明らかにする、「変化」を捉える、といった比較をとまなう学習活動は低学年から取り入れられており、そのうえで「対象の特徴を明らかにする」ことへとつながるように学習が積み上げられている。

(4) 因果関係をつかむ

「因果関係をつかむ」力の習得については、「テキストから理由・根拠を見つける」ことを基礎とし、段落どうしのつながりに着目してその関係性を捉えることと、因果関係に注意して文章や話を組み立てることを関連させながら、説得力のある「主張」－「根拠」－「理由」の関係をつかむ学習へと積み上げられている。

ウ 「自分の考え」のカリキュラム

学年が進むにつれ、徐々に客観的で説得力のある判断・評価ができるように、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」すべての領域を通して積み上げられている。

(5) 各学年の「批評」の到達段階

対象のよさ、特性、価値などについて、分析を通じて得られた客観的な根拠に基づき、判断・評価を最終決定するのが、ここ（批評）でいう「自分の考え」である。これまでにみてきた「分析の観点」「分析」「自分の考え」のカリキュラムを総合し、各学年においてどのような批評ができればよいかについて、到達段階とその過程を考察した。

ア 第1学年

第1学年で習得する「批評」は、「良いところ」や「良いもの」を挙げ、主観的・感覚的な印象でもよいので、その判断の根拠を意識して述べるのが到達点であると考えられる。学年の初期は、「何」について見るか、どのように述べるかといった指示はなく、自由な気付きや感想を挙げる活動になっている。しかし、「どこ」に着目して「何」について考えるのか、また、「何」について考えるために、「どこ」に着目するか、「何」を見つけるかといった観点や着目点が、「読むこと」を中心とした学習材の課題や、課題を達成するための「たすけ」や「言葉の力」に提示され、根拠や理由を徐々に意識できるようになっている。また、複数の材料から「共通点」を見つけて分け、見出しをつける学習は、「根拠」をもとに「考え」を導き出す思考活動であり、そこでつける見出しは、観点を見つける力にもつながっていく。さらに、比較を通して捉えられる「差異」や「変化」は、「良いもの」の選択や「賛否」・「是非」を判断する根拠になる。このように、第1学年では、観点の習得や、分析作業を通して、根拠を意識して「良さ」を述べるようになる段階だと捉えられる。

イ 第2学年

第2学年で習得する「批評」は、根拠や理由を明確にして「良さ」や「賛否」「是非」を述べるのが到達点であると考えられる。「分析の観点」には、小説の学習材において「登場人物の言葉や行動の意味」「描かれ方の意味・効果」「作品の構成の意味・効果」が加わり、第1学年でも学ばれた「語り手の語り方の意図」や「非連続テキストの役割・意味」と合わせ、根拠をもとに解釈する力を要する内容が増えている。また、第2学年での判断の内容は、よいものを自由に選ぶことから、具体的な対象について賛否や是非を問うものへと変わっている。賛否や是非を述べる際には自分の立場を明らかにすることが必須であり、自分の立場や考えを相手に理解・説得させるための明確な根拠を示すことが求められるようになる。第2学年では、「反証」部分を含んだ説明的文章や、「反証」を取り入れて多面的な見方から意見文を書く課題が加わっており、これらの学習材を中心に、説得力のある根拠を見出すことを学んでいる。このように、第2学年では、客観的・論理的な力を徐々に身に付けながら、自分の立場や根拠を明確にして「良さ」を述べる段階だと捉えられる。

ウ 第3学年

第3学年で習得する「批評」は、さまざまな観点から比較して対象の特徴を明らかにし、客観的・論理的な判断に基づいて評価したり、最も優れているものを選択したりすることが到達点であると考えられる。第3学年では、自分の考え（判断・評価）を述べる課題の指示が、これまでの「感想」「意見」という指示から「評価」という語に総合されており、学年当初には「読むこと」「話すこと・聞くこと」の学習材において、「評価」する活動が連続している。「読むこと」では、俳句や小説を題材に「文学作品」を対象とした「批評」の学習がなされ、「話すこと・聞くこと」の学習材では、「説明的文章」の学習材において習得してきた因果関係を主な観点とし、論理性を問う学習になっている。学年後半に入る「書くこと」の学習材では、「非連続テキストと文字の組み合わせ（ポスター）」といった「社会生活に関わる事物」を対象とする「批評」が行われるようになっている。このように、各領域において、「評価」することが明示され、第3学年での新しい学習の習得を図ると共に、既習の観点や分析方法を総合・応用して「批評」する場が設定されている。また、第3学年では、差異や変化を捉えるだけでなく、対象の特徴を明らかにするために比較が用いられている。さらに、「さまざまな観点から分類して、比較する」「論理を捉えて、その関係を整理する」「人間関係とその変化を捉え、登場人物の考えの背景や理由を考える」といった、「分析の観点」や「分析の方法」が、一つの課題に複数含まれ、段階を追って思考していく学習が見られる。このように、第3学年では、これまで個々につけてきた力を一連の力として定着させる課題を行うと共に、より分析的な力の育成が図られる課題によって「批評する力」が培われていき、『解説』で定義された「批評」に求められる判断や評価ができる段階に到達すると捉えられる。

4 まとめ

(1) 研究の成果

本研究では、中学校での目標となる言語活動として「批評」を措定し、「批評する力」自体のカリキュラムを考察した。具体的には「分析の観点」「分析する」「自分の考え」を柱とし、それらの能力がどのように習得されていくかを、『東書』教科書をモデルとして検討した。

本研究で検討したのは一教科書の例でしかないが、それぞれの力が段階的・螺旋的に系統化して習得されていることを示し、各学年での「批評」の到達段階を次のように捉えることができた。

第1学年：根拠を意識して「良いところ」や「良いもの」について述べる段階

第2学年：自分の立場や根拠を明確にして「良さ」や「賛否」「是非」を述べる段階

第3学年：さまざまな観点から対象の特徴を明らかにし、客観的・論理的な判断に基づいて評価したり、最も優れているものを選択したりする段階

本研究で分析した「批評すること」の過程やそれぞれの過程で必要な力のリストは、教科書を超えてある程度の一般性をもつものであると考えている。

(2) 今後の課題

本研究は、「批評する」能力の育成を目的に、「批評」の内容作りに特化してカリキュラムを検討したものである。ゆえに、今後の研究課題として、以下のことが考えられる。

- ① 授業を実践するにあたって、学習活動をどう展開していくか、授業作りの研究が必要である。
- ② 「批評」の内容をよりよく表現するため、「説明する力」を育成するカリキュラムを合わせて作成することが望ましい。
- ③ 批評の意義を感じさせ、批評活動に対する意識や態度を育てるために、日常生活と授業との関連を図ることが大切である。

【引用・参考文献】

- 幾田伸司・小島明子・茂木俊伸・村井万里子・黒田俊太郎・泉嘉泰・金子萌・高山智行・中村良之・濱田美貴・福井光恵・三浦真美（2013）「小学校国語教科書における「言語活動力」カリキュラムの検討—光村図書・6年（平成23年度版）『創造』の場合—」『鳴門教育大学授業実践研究』第12号，pp. 45-53，鳴門教育大学。
- 井関義久（1972）『批評の文法：分析批評と文学教育』，大修館書店。
- 大槻和夫編（2001）『国語科重要用語300の基礎知識』，明治図書。
- 大西道雄（1990）『意見文の指導』，溪水社。
- 倉沢栄吉（1979）『国語教育講義—新時代の読書指導を中心に』，新光閣書店。
- 小田迪夫（2002）「読むことの学習指導の研究史的展望」『国語科教育学研究の成果と展望』，pp. 224-228，明治図書。
- 国立教育政策研究所編（2002）『生きるための知識と技能：OECD生徒の学習到達度調査（PISA）：2000年調査国際結果報告書』，ぎょうせい。
- 小西甚一（1964）「分析批評の有効性」『文學』第32巻第6号，pp. 72-81，岩波書店。
- 鈴木みどり（1997）『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』，世界思想社。
- 高木まさき（2002）「読むことの指導内容論の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望』，pp. 684-693，明治図書。
- 高木まさき（2008）『平成20年改訂中学校教育課程講座国語』，ぎょうせい。
- 鶴田清司（2008）『「読解力」を高める国語科授業の改革—PISA型読解力を中心に』，明治図書。
- 西尾実（1929）『国語国文の教育』，古今書院。
- 向山洋一（1989）『「分析批評」で授業を変える』明治図書。
- 森田信義（1984）『認識主体を育てる説明的文章の指導』溪水社。
- 文部科学省（2008）『中学校国語科学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社。
- 平成24年度版国語教科書・指導書
- 東京書籍『新しい国語1～3』 光村図書『国語1～3』 教育出版『伝え合う言葉1～3』
- 三省堂『中学生の国語1～3』 学校図書『中学校国語1～3』